[ ]内は肯定的評価(A+B)の割合　　A：とてもあてはまる、B：まあまああてはまる

	アンケート項目	対象	Aの目標	R4年度 %		R5年度 %		課題と考察	学校関係者評価委員からの意見（縮約した意見もあります）　n=10	学校から（令和6年度の方向性）
1	**友達に声をかけ、仲良くしている。**	教職員	60	33	[100]	33	[100]	目標値は未達成である。肯定的評価は三者ともに90%を越えている。しかし、児童のA評価と教職員、保護者のA評価は経年変化はほぼないが児童の評価との乖離が大きい。令和5年度第2回WEBQU(学級満足度調査)結果によれば、全20学級中17学級(85%)が親和型学級(親和的なまとまりのある学級)であり、学級内の児童同士の関係は良好であるといえる。残る3学級については、かたさ型(教師による統制が強い傾向)1学級、ゆるみ型(教師による統制が弱い傾向)2学級となっている。所謂学級崩壊につながるような不安定型や崩壊型の学級はないことから、五小児童が良好な友人関係の中で過ごしていることを保護者が自覚できるような発信または機会を設定することが必要である。	○子供たちは仲良くしていると思う。 ○目標値に達していないが児童は努力している。 ○教職員への問いが、「方法論」なのか「結果」なのかが読み解けない。「結　果」であるならば、全ての子供が仲良くしていることはないので評価が低いことは納得できる。→① ○日常の子供のたちの中にある小さな言い争いを教職員はよく見ているのだと思う。 ◇保護者への意識改革が必要と思った。→② ◇友達に声をかけることが少ないので積極的に話しかけるよう声掛けが必要。→②③ ◇１年生と６年生ではこの設問の意味が大きく変わってくる。高学年になるほど人間関係が複雑になるので、高学年の回答が気になる。→④	①「方法論」「結果」なのかという点に関しては、本項目のみならず、本校学校評価全体の課題であると捉えている。令和６年度以降の目標値については例えば、取組目標と成果目標とに分けて設定し、教職員は取組、成果の２方向から評価し、児童及び保護者は成果について評価するようにするなど、より分かりやすい学校評価となるよう検討する。 ②五小児童の人間関係は概ね良好であり、五小児童が良好な友人関係の中で過ごしていることを保護者が自覚できるような発信または機会の設定を検討する。。 ③評価しづらい設問であると捉えている。「仲良く」を声をかけることと限定しているようにも捉えられるものであり、次年度は設問を評価しやすい文言に変更することを検討する。 ④高学年の回答：5年生　A…77.1%、B…21.9%、C…0.9%、D…0% 6年生　A…75.0%、B…25.0%、C…0%、　D…0%
		児童	90	78	[99]	79	[99]			
		保護者	55	42	[90]	43	[91]			
2	**挨拶・返事・後始末を進んでしている。**	教職員	25	14	[71]	4	[71]	目標値は未達成である。挨拶は校内・外を問わずよくできている。「後始末」という挨拶と関連のない内容を列記したため評価が分かれたと考える。項目の検討が必要である。また、自由意見では後始末に課題がある旨が記されており、後始末については家庭と歩調を合わせ、機会を捉えた指導を継続する必要がある。	▼学校外での挨拶ができているとは思えない。「こんにちは」等言える子は稀。保護者の評価が当てはまる。→① ○あいさつ運動では目を見て挨拶をしてくれる低学年が多い。そういう子供を育 てていきたい。 ○挨拶は８～９割ができている。後始末は保護者や教員か声をかけ、子供に意識させることが必要。 ◇家庭内でも挨拶、後始末が適切に生活習慣に密着しているのか？保護者自らが実践努力することがまずは一番先。→① ◇「後始末」より「後片付け」の方がしっくりくる。→② ◇「後始末」がセットになっているため、評価の意図が定まらない。設問に問題がある。→② ◇「挨拶」と「後始末」は関連のない内容かもしれません。「挨拶」と「返事」はしっかりできていると良いですね。→②	①目標値は未達成であるが、挨拶は校内・外を問わずよくできていると認識している。関係者評価委員の間で挨拶の捉えに差があるのは、子供たちと評価者との関係性によるものと考える。五小を訪問する来客に子供たちが挨拶する姿は見られている。挨拶については、令和６年度も引き続き家庭、地域と連携して推進する。 ②「後始末」という挨拶と関連のない内容を列記したため評価が分かれた。「後始末」については令和５年度教育課程届（市教委受理済み）の基本方針に文言があったため、設問として設定した。令和６年度については、設問を「挨拶」のみとすることを検討する。
		児童	70	60	[98]	60	[98]			
		保護者	30	18	[80]	20	[82]			
3	**自分でやるべき事がきちんとできる。**	教職員	20	10	[81]	8	[75]	目標値は未達成である。児童のA評価と教職員、保護者のA評価の乖離が大きい。児童に対する教職員、保護者の期待が大きいことが乖離を生んでいると考える。「やるべきこと」を各自が意識できるよう、引き続き自分で考え選択させる場面を意識した教育活動を行う。	◇ 期待値が大きいため、目標値が低い設定なのでしょうか。→① ◇教職員への問いが、「方法論」なのか「結果」なのかが読み解けない。→1-① ◇低学年にとってはやるべきことというのが何か分からないこともある。保護者や教員が声掛けし考えさせることが重要。→②③ ◇教員が求めることを子供たちがしっかりと理解できるように言葉を尽くすことが大事。→③ ◇自分で考え選択することはとても大事。ゆっくり育てていってもらいたい。→③	①令和6年度の目標値については、前年度評価結果から10P程度上回る数値を設定している。 ②「やるべきこと」の内容について、教職員、保護者、児童三者が三様のイメージをもっている可能性がある。設問にて「やるべきこと」が何についてなのか限定するなど、設問の在り方を検討する。 ③「やるべきこと」を各自が意識できるよう、引き続き自分で考え選択させる場面を意識した教育活動を行う。
		児童	65	53	[99]	61	[99]			
		保護者	30	18	[81]	18	[81]			

[ ]内は肯定的評価(A+B)の割合　　A：とてもあてはまる、B：まあまああてはまる

	アンケート項目	対象	Aの目標	R4年度 %		R5年度 %		課題と考察	学校関係者評価委員からの意見（縮約した意見もあります）　n=10	学校から（令和6年度の方向性）
4	**言葉遣いに気をつけている。**	教職員	25	14	[90]	4	[75]	目標値は未達成である。児童のA評価と教職員、保護者のA評価の乖離が大きい。児童に対する教職員、保護者の期待が大きいことが乖離を生んでいると考える。指導に当たっては児童に具体的に適切な事例を提示すること、教員、保護者が自らの言葉遣いを再点検する機会を設けることが必要である。	○子供たちの言葉遣いはよいと思う。 ○大人に対する言葉遣いは注意が必要だが、五小の子供の言葉遣いが悪いとは感じない。 ◇どうして教職員の評価が下がったのか知りたいです。→① ◇言葉遣いについては中学年まで敬語を使えない子供をよく見る。保護者と教職員の声掛けにより意識させる。→① ◇子供は生活の中で保護者の言葉遣いを真似ていることが多々あり、保護者への声掛けは必要。→① ◇教職員への問いが、「方法論」なのか「結果」なのかが読み解けない。→1-①	①教職員の評価が低い理由としては、日常の児童の会話の中には、現代風の言い回しが多数みられることが関係している。注意をしすぎると子供たちのコミュニケーションを阻害することにつながるものであり、指導上の匙加減が難しいものである。児童間のコミュニケーションが過度に阻害されることのないよう留意しつつ、適切な言葉遣いについて指導を積み重ねる。指導に当たっては児童に適切で具体的な事例を提示するようにする。また、教員、保護者が自らの言葉遣いを再点検する機会を設けることを検討する。
		児童	70	55	[96]	58	[97]			
		保護者	25	14	[73]	14	[73]			
5	**楽しく学習に取り組んでいる。**	教職員	45	14	[95]	33	[91]	目標値は未達成であるものの、児童は95%、保護者は78%が肯定的評価をしており、一定の評価はできる。否定的評価をしている児童が5%(30人超)おり、教員は子供たが主体的に楽しく学べる授業の工夫、教材研究等を更に行う必要がある。主体的な学びについて今年度に引き続き研修を重ねる。	◇一定数学習が楽しくない子供がいるようである。教職員は飽きさせない授業を考え、保護者は宿題宿題と言わないようにしないといけない。→① ◇先生の力量ですね。学年に合った取り組みの工夫、大変ですがお願いします。→① ◇小学生に学ぶことが楽しいと思わせるような授業をすることは並大抵なことではない。授業内容を子供目線の日常に落とし込む必要がある。→① ◇授業の工夫は必要。→① ◇先生方の肯定的評価が下がっているのが残念。ここは、先生方に頑張ってもらいたい。→②	①教員は児童が主体的に楽しく学べる授業の工夫、教材研究等を更に行う必要がある。主体的な学びについて今年度に引き続き研修を積み重ねる。 ②教員の評価が下がっている理由として、全ての児童が楽しく授業に取り組むことがA評価であると極端に捉えている面があると考えられる。教員の自己評価の低さは、必ずしも授業に対する自信のなさとは言えず、目指す授業像が高いものであること、現状に満足していないこと、授業改善意欲の高さの表れであると考える。
		児童	75	63	[95]	64	[95]			
		保護者	35	20	[76]	22	[78]			
6	**自ら課題を見つけ解決している。**	教職員	20	10	[77]	8	[72]	目標値は未達成である。この観点については、項目５と同様、大きな課題であると認識し教育活動に取り組んできた。教職員の回答から授業力についての問題意識が見て取れる。主体的な学びについて今年度に引き続き研修を重ねる。また、保護者が主体的に学ぶ子供たちの姿を見る機会を増やし、保護者の主体的な学びへの理解を促したい。	▼授業内容をよく理解しないで受けている子が見受けられる。ここに目を配ることを再確認する必要がある。→① ○大人でも難しい。半数の児童ができていることは評価できる。保護者と教職員の声掛けで意識できるようにする。 ◇低学年には難しい項目。助言が必要であり、先生の力量。→② ◇保護者評価が低いのが残念。→③ ◇前年より児童は上がっているのに反して、教職員は下がっている。もっと児童に寄り添った授業を考察し続けていただきたい。→③	①授業内容、特に基礎的・基本的な事項については、習熟度別指導、放課後学習教室(地域学校協働本部主催)における指導を充実させることを検討する。 ②主体的な学びは、児童の実態に応じた指導を行うことで、低学年においても可能である。 ③「主体的な学び」については、保護者にも十分に理解してもらう必要がある。子供たちが自ら課題を見付け、自ら学習計画を立て、自ら学習方法を選択する「主体的な学び」については、多くの保護者が未経験の授業スタイルであり、今年度に引き続き教員が研修を積み重ねるとともに、子供たちが主体的に学ぶ姿を見る機会を増やすなど、保護者に対して「主体的な学び」について啓発する。
		児童	55	42	[94]	48	[91]			
		保護者	25	13	[56]	13	[56]			
7	**思いや気持ちを自分の言葉で表現している。**	7	25	12	[83]	12	[80]	目標値は未達成である。今年度は昨年度に引き続き、「書くこと」の力を高める研究を通して、自分の気持ちや思いを表現する場面を意図的に設定してきた。「言葉による表現」には音声による表現もあり、保護者の多くは音声表現を基準に評価したものと考える。国語科で学んだことを他教科等や日常生活に生かせるよう、指導を積み重ねていく。	○自分の思いを文章で表現することは大切。自分の内心を確認できる。五小の子供たちは書くことにはあまり抵抗がないように思える。 ○大人でも難しい。半数以上の児童ができると回答していることは素晴らしい。保護者と教職員がじっくり話を聞くことが大切。 ◇「書くこと」の表現であれば設問を変えてはどうか。→① ◇保護者評価が低いのが残念。→② ◇他者とコミュニケーションをとるために自分の思いや気持ちを表現すること一番大切。児童の肯定的回答が増えてほしい。→②	①設問については、特に文章表現のみを対象としたものではない。 ②「言葉による表現」には音声による表現もあり、保護者の多くは音声表現を基準に評価したものと考える。音声による表現、文章による表現など、国語科で学んだことを他教科等や日常生活に生かせるよう、指導を積み重ねていく。
		児童	65	52	[94]	55	[95]			
		保護者	40	26	[82]	25	[81]			

[ ]内は肯定的評価(A+B)の割合　　A：とてもあてはまる、B：まあまああてはまる

	アンケート項目	対象	Aの目標	R4年度 %		R5年度 %		課題と考察	学校関係者評価委員からの意見（縮約した意見もあります）　n=10	学校から（令和6年度の方向性）
8	**よく考えてから発言している。**	教職員	15	0	[0]	17	[75]	目標値は２者で未達成である。教職員の項目の目標値は達成しているが、昨年度の教員評価が低かったため目標値を低く設定したことによるものであり、決して満足できる数値ではない。児童の自己評価はA評価、肯定的評価共に高く、教職員、保護者との乖離が大きい。乖離は児童と教職員、保護者との評価基準の違いによるものであると考える。	○児童は頑張って考えてから発言しているのだと思う。 ○大人にとっても難しいことがある。半数の児童ができていると回答しているのが素晴らしい。保護者と教職員で意識させる声掛けができればよい。 ◇設問が難しい。低学年だと手を挙げることが大事で、一瞬の判断で手を挙げ発言することもあるのではないか。→② ◇手を挙げない子、進んで発言しない子にも思いはある。拾い上げる工夫が必要。→①	①発言の場面はペア、小グループ、学級など多様な形態が考えられる。また、発言は、必ずしも口頭の発言のみではない。ノート、ICT機器の活用など、発言の手段も多様であってよいと考える。発言の様態を多様に捉えられるよう、設問の「発言」という文言を改めることを検討する。
		児童	65	51	[94]	51	[94]			
		保護者	30	12	[67]	10	[65]			
9	**健康に気をつけながら進んで運動に取り組んでいる。**	教職員	30	14	[85]	38	[92]	目標値は２者で未達成である。コロナ禍前の状況程度に休み時間の活動が活発化してきたことにより、教員の評価が向上したものと考える。	▼コロナ禍とスマホ、youtubeにより、体を動かす時間が減少している。学校外でも外で活発に動くよう改めて指導が必要と感じる。→① ○みんなきちんと手洗いして健康に気を付けていると思う。 ○休み時間など先生も率先して外に出て活動する場面を目にする。子供たちの元気がよい。 ◇児童に対しては健康というワードが良く分からないと思われ、質問が良くない。→②	①目標値は２者で未達成である。コロナ禍前の状況程度に休み時間の活動が活発化してきたことにより、教員の評価が向上したものと考える。引き続き、外遊びの奨励、体育授業における運動時間確保に努める。 ②「健康」という言葉自体は多くの児童に理解されているものと考える。しかしながら、「健康に気をつけながら運動に取り組」むという文言に分かりづらさがあった可能性がある。「健康を維持する」「健康な体でいるため」等、児童に誤解が生じない文言を検討する。
		児童	80	66	[94]	67	[96]			
		保護者	40	28	[74]	30	[76]			
10	**栄養に関心をもち好き嫌いなくなんでも食べている。**	教職員	20	10	[67]	8	[50]	目標値は未達成である。児童の意識向上のため、給食室前の給食に関する掲示物の運営に児童も関わった。栄養士による食育の授業、毎日の給食に添えられる「給食室だより」等、児童の目に見える取り組みを行ったことが児童の自己評価の高さにつながっていると考える。	▼好き嫌い以前に給食の時間が短すぎる。→① ○児童へのアプローチとしての給食だよりは食育に対する関心が高くなり、非常に効果的だと思いました。 ○昨年に比べ栄養に関心をもてているのが分かるので、今後も関心が持続するよう掲示物など工夫していければよい。 ○児童の意識向上ができたことは素晴らしい。 ◇食は楽しみでもあり、嫌いなものは無理して食べる必要はないと考える。→② ◇リクエスト給食など、児童が給食のメニューを振り返り自分の子のみを伝えるなど、また、地場野菜の活用により狛江を知ることとなる。→③	①給食の時間は40分間をとっている。喫食時間は20分程度確保できており、ほとんどの児童は、お代わりを含め時間内に喫食できている。給食の時間をこれ以上とることは、午後の時程を繰り下げることとなり、下校時刻が遅くなることにつながる。現時点において、給食の時間の延長は考えていない。 ②児童の食べる量、食物または味付けの好み、食べる時間等に個人差があることについて、教職員は認識し、給食指導を行っている。楽しみながら喫食できるように、本校ではコロナの5類移行後の早い段階で対面による給食指導を実施した。また、様々な理由により完食することが難しい児童に対して完食を強いるような給食指導は行っていない。 ③リクエスト給食、地場野菜を使った献立を取り入れ、食育の充実を図っている。
		児童	55	44	[89]	52	[91]			
		保護者	45	25	[69]	26	[70]			
11	**途中で投げ出さず、最後までやり抜いている。**	教職員	35	24	[86]	17	[81]	目標値は未達成であるものの、肯定的評価においては、三者の評価が共に高いものとなっている。全ての教育活動をとおして、困難に負けない、しなやかな心、レジリエンスを備えた児童の育成に引き続き取り組む。	○図供たちを見ていると、途中で投げ出す子は稀で、一生懸命取り組む姿勢が感じられる。 ○図年よりもやり抜いていると回答しているので、やり抜く必要瀬を保護者と教職員で意識付けする。 ○図童の多くは頑張って最後まで取り組んでいる。 ◇図味関心がないことに早々見切りをつけることも必要では？ ◇図護者が学習面だけではなく日常の生活面も考慮しているのか、評価が厳しくなる。	①本設問は興味関心がないことをやらないという選択肢を否定するものではない。本設問で想定しているのは、興味関心があることであっても、乗り越えられるはずの困難に対して、粘り強さを発揮し、最後までやり抜く姿である。 ②保護者が日常の生活面を考慮していることは十分に考えられる。
		児童	70	54	[96]	60	[95]			
		保護者	40	22	[79]	22	[79]			
12	**家庭学習に継続的に取り組んでいる。**	教職員	35	19	[90]	21	[84]	目標値は未達成である。主体的な学びを進めていく上で復習やドリル学習的なものが多い傾向にある「宿題」の在り方について検討する。	▼年を追うごとに数値が下がっている。迅速な対応が必要なので、保護者と教職員でしっかりと声掛けして意識付けていかないといけない。 ▼長期休業中の宿題については一考する必要がある。 ◇家庭学習＝宿題と思いがちとなる。「主体的な学び」難しいですね。→① ◇学年で違うと思いますが、低学年から習慣にできるように指導してほしい。→①②	①家庭学習とは何を指すのか。保護者との共通理解が必要である。 ②教育の第一義的責任は家庭にあるのであり、本来、所謂「宿題」は余計なお世話であるはずのものである。各家庭が家庭学習について考える機会を保護者会で設けるなど、「家庭学習」について考える機会を設定することを検討する。
		児童	75	63	[95]	61	[94]			
		保護者	45	33	[83]	34	[84]			